

シリーズ“私の風景誌”より

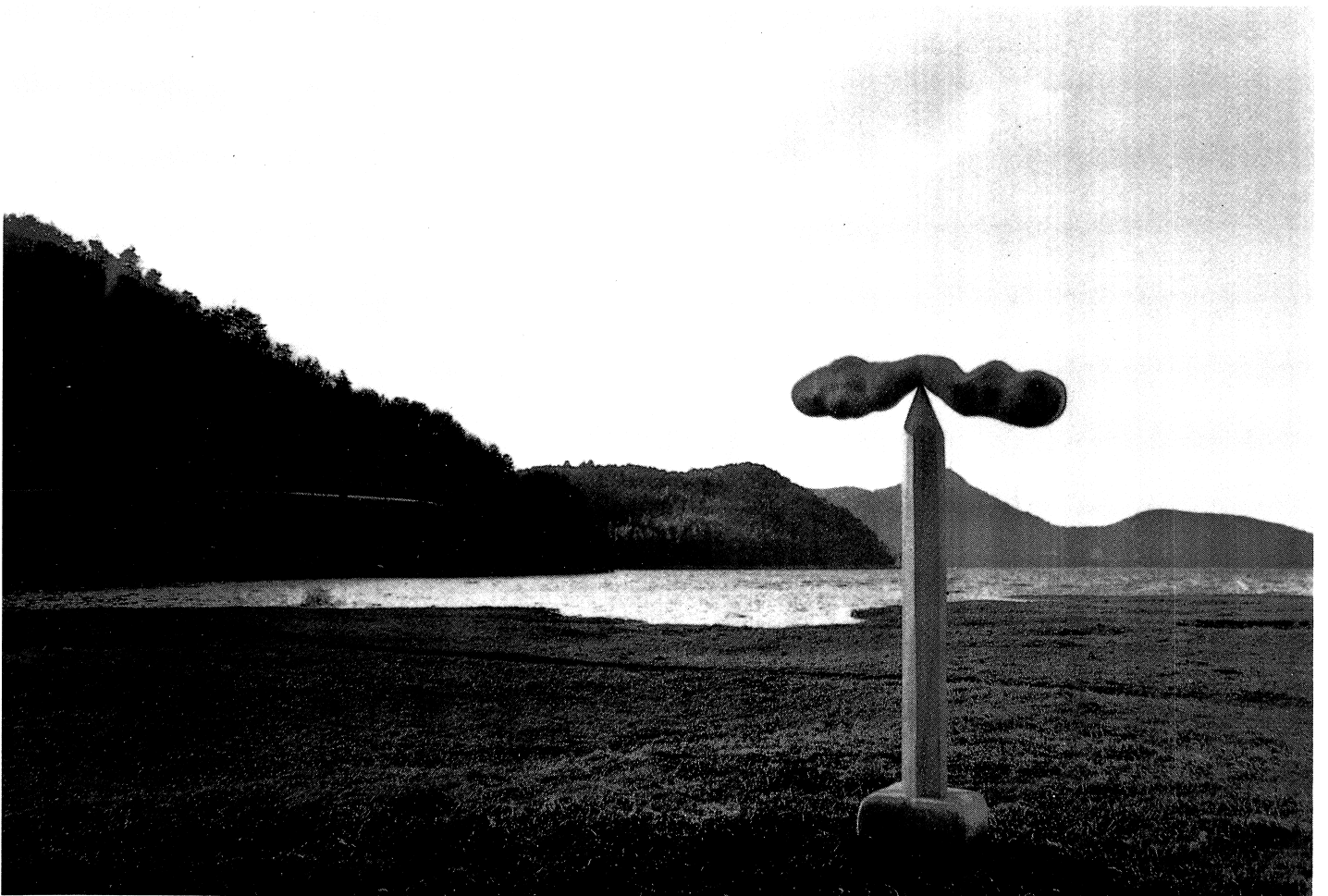
My Record of the Scenery——Series
(Wood Works——Sculpture)

坪井勝人

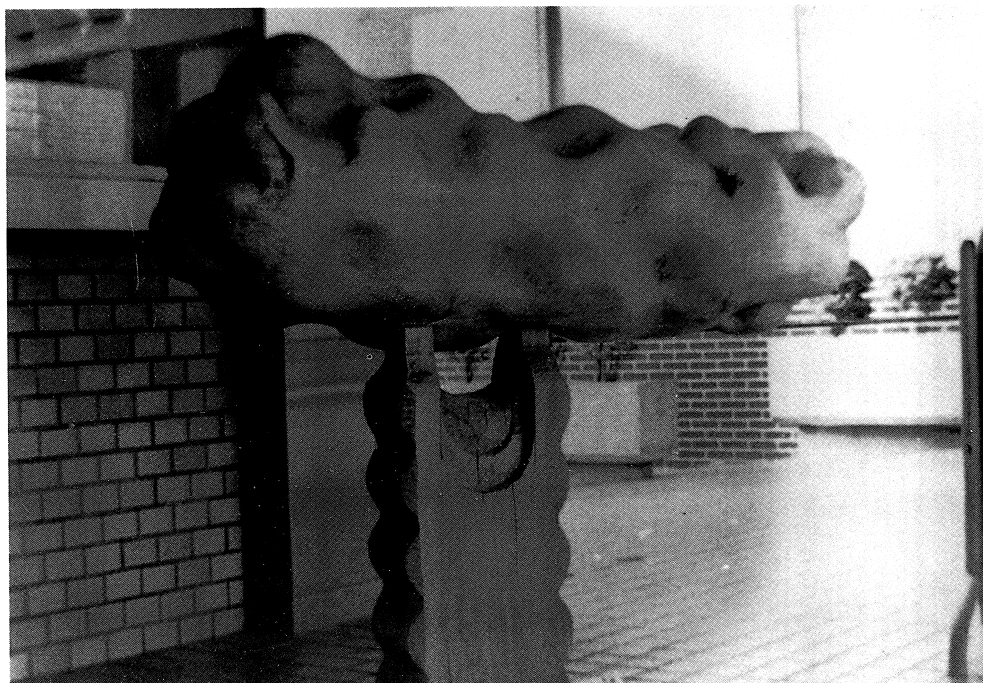
1969年、夏、秋田県田沢湖畔で開催された『日本青年木彫シンポジウム』に参加した。その事により私と“木”との出会いが始まり、そして、この“木彫刻”作業も約20年近くになる。

“木”との関りの旅の途中で数多くの職人達と出会い、彼等より『木のころ』について多くの啓示を受ける。

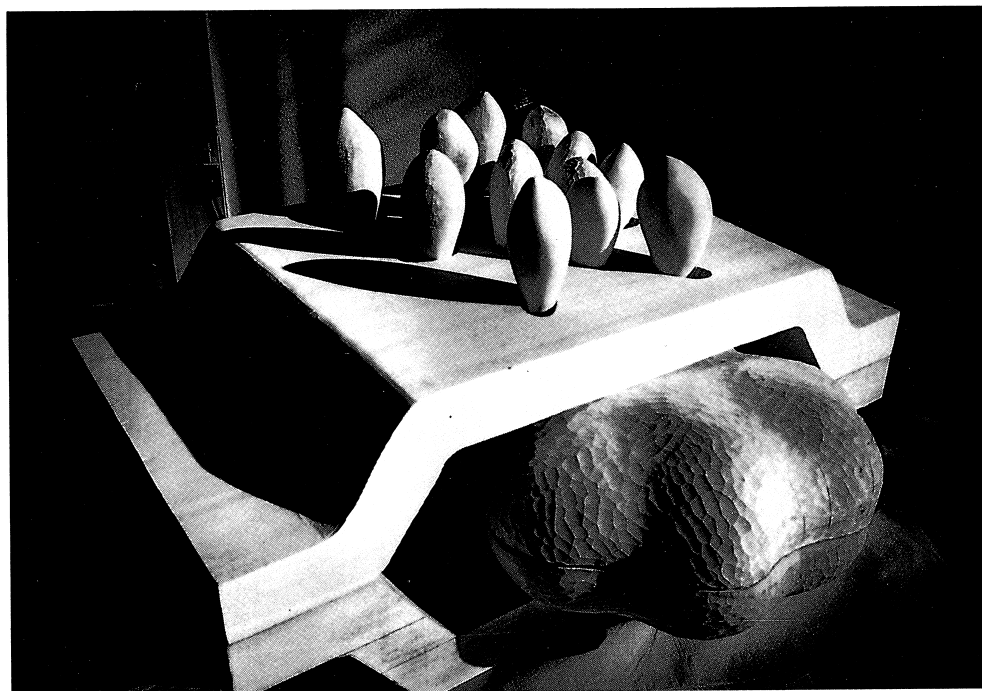
私の中で、時の流れと、風景は、記憶や残像のカプセルとなって、彫刻作品へと転化してゆく。また、この彫刻物は『彫刻のある風景ではなく、風景のある彫刻』でありたいと思っている。



1976年 「雲を描く」(楳、170×90cm)



1973年 水の諸形態より「蒸気・雲」(ミズメ、170×160×60cm)



1974年 水の諸形態より「飽和状態」(楕、50×120×120cm)

ここ5・6年の仕事は“現象風景”と思われるような方向へとむかっている。
例えば、「水の諸形態」である。雨とか雲、蒸気、又は風などの流動的な状態を
感性でとらえ、この不定形態を造形という作業の中で“物”におきかえようとしている。

これらは、ある意味で、記憶とイメージの“彫刻化”でもある。
その形は、存在するであろう何かに似てはいるが、又、何も似てはいない。

浅き河床に 指 落し
濡れたる石を 陽に敷きて
燃え立つ蒸気に 影ぞ 知る

樹枝の角度を 計りつつ
杜に座りて 風を喰う

時の振り子が
価値! 価値! と
耳より 遠くで 揺れ動く

この地上の 星達よ
夜のしろきは 知らねども



1980年 「時の振り子はゆらゆらと往きて帰りにて岸边を巡る偲ぶ想いの風景誌」(楢・石、170×250×220cm)

歴史の回廊を 廻りきて
 独り想う 礎石の深さ
飛鳥の石舟は 揺れて
 揺られて 流れ過ぐ
この地上に 柱を 峻立させよ
 石を積むのは もう やめた

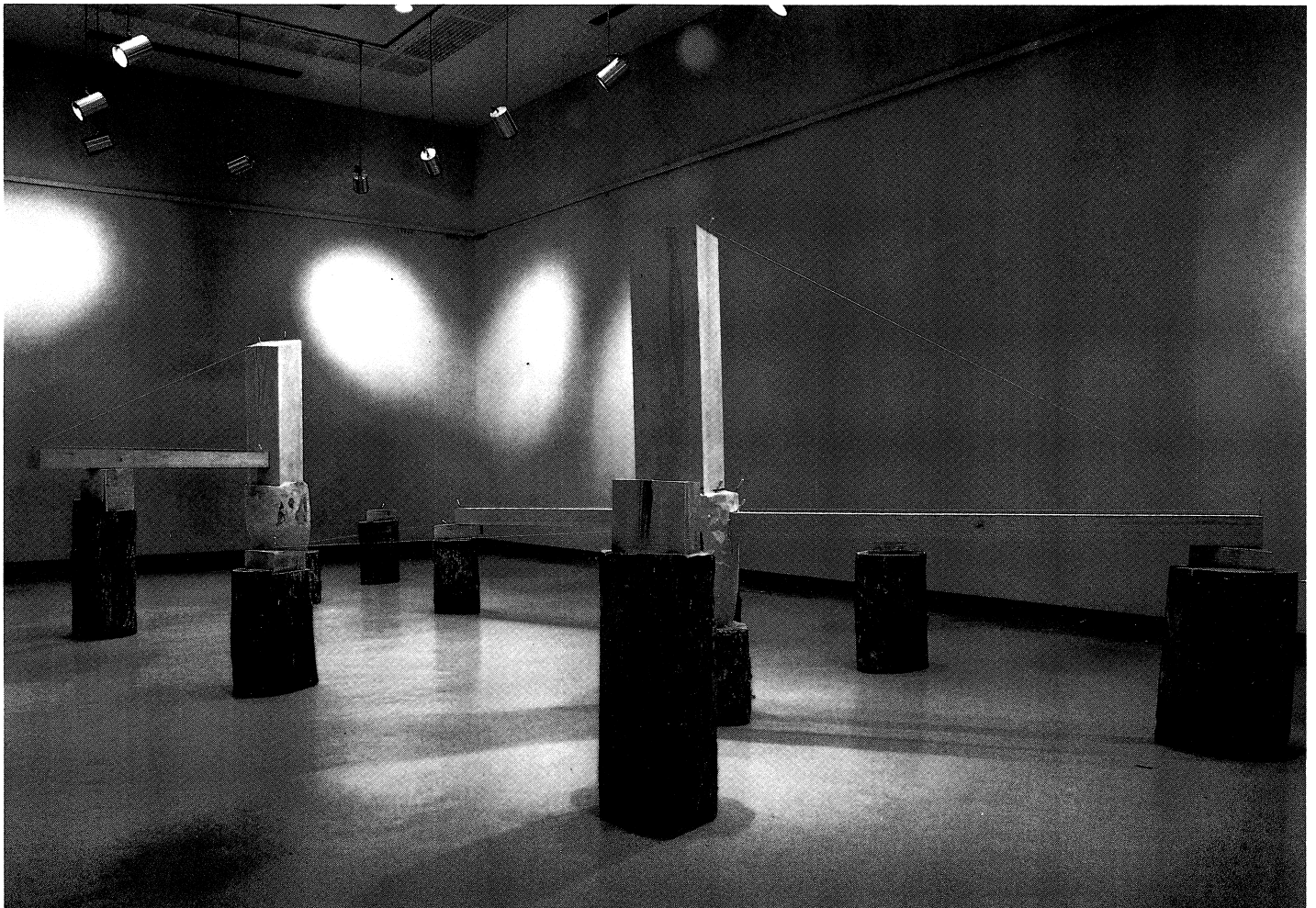
洞窟より出て
 光の原野に 柱を 建てよ
 定義のない 柱を 立てよ

カルナックの アリニューマンのように
ヘリオポリスの オベリスクの如く
ソールズベリーの ストーンヘンジの
 如く 柱を 建てよ!

やわらかなる 時の頁を捲る中で
 カリアティードを 刻め
 もう 永遠なるもの などと云わぬ
 柱を立てよ!

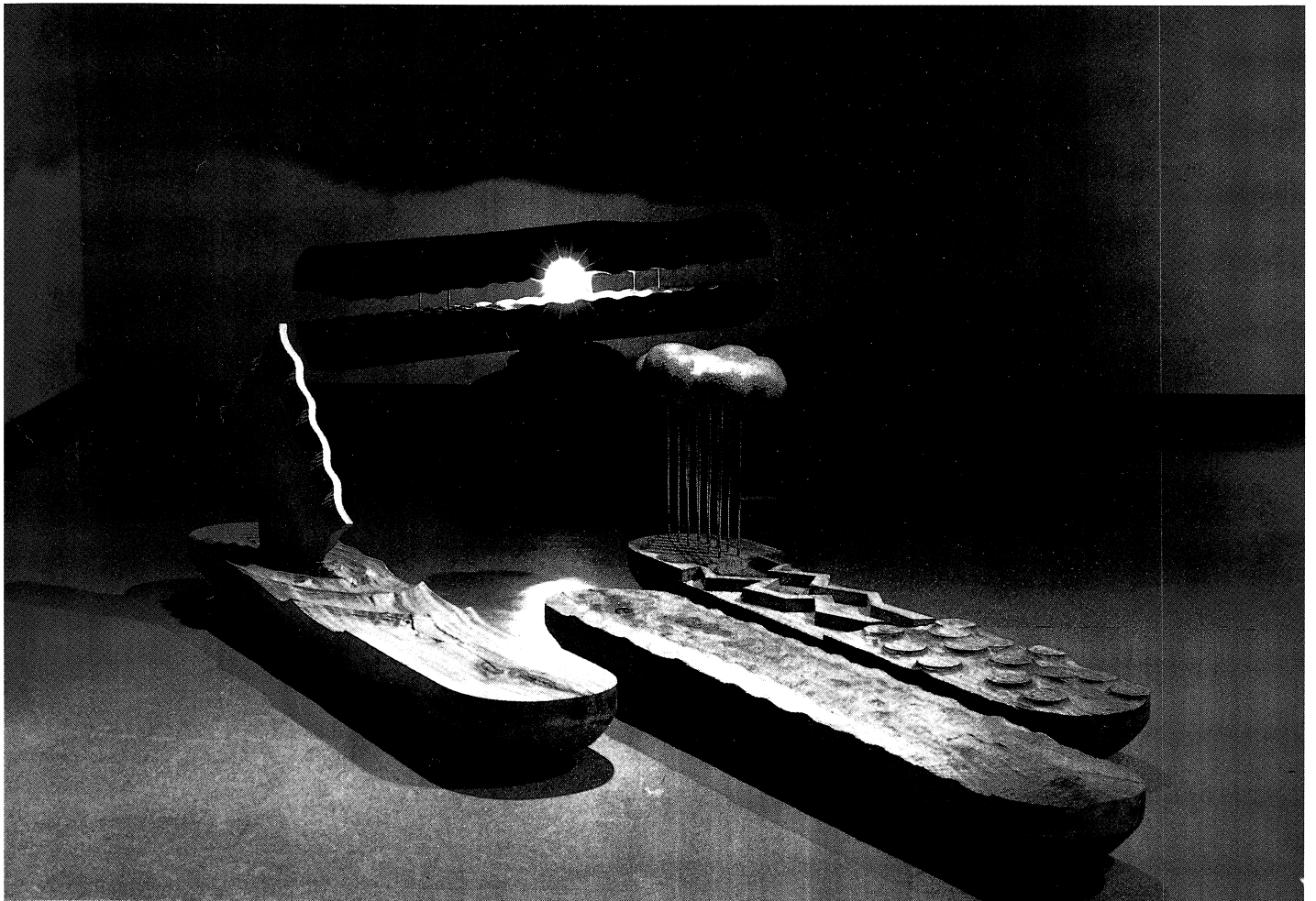
 柱を建てよ!

石を穿ち 天より下る
 柱を立てよ!



1983年「大和の礎」インスタレーション(樺・アサダ、200×1500×1000cm)

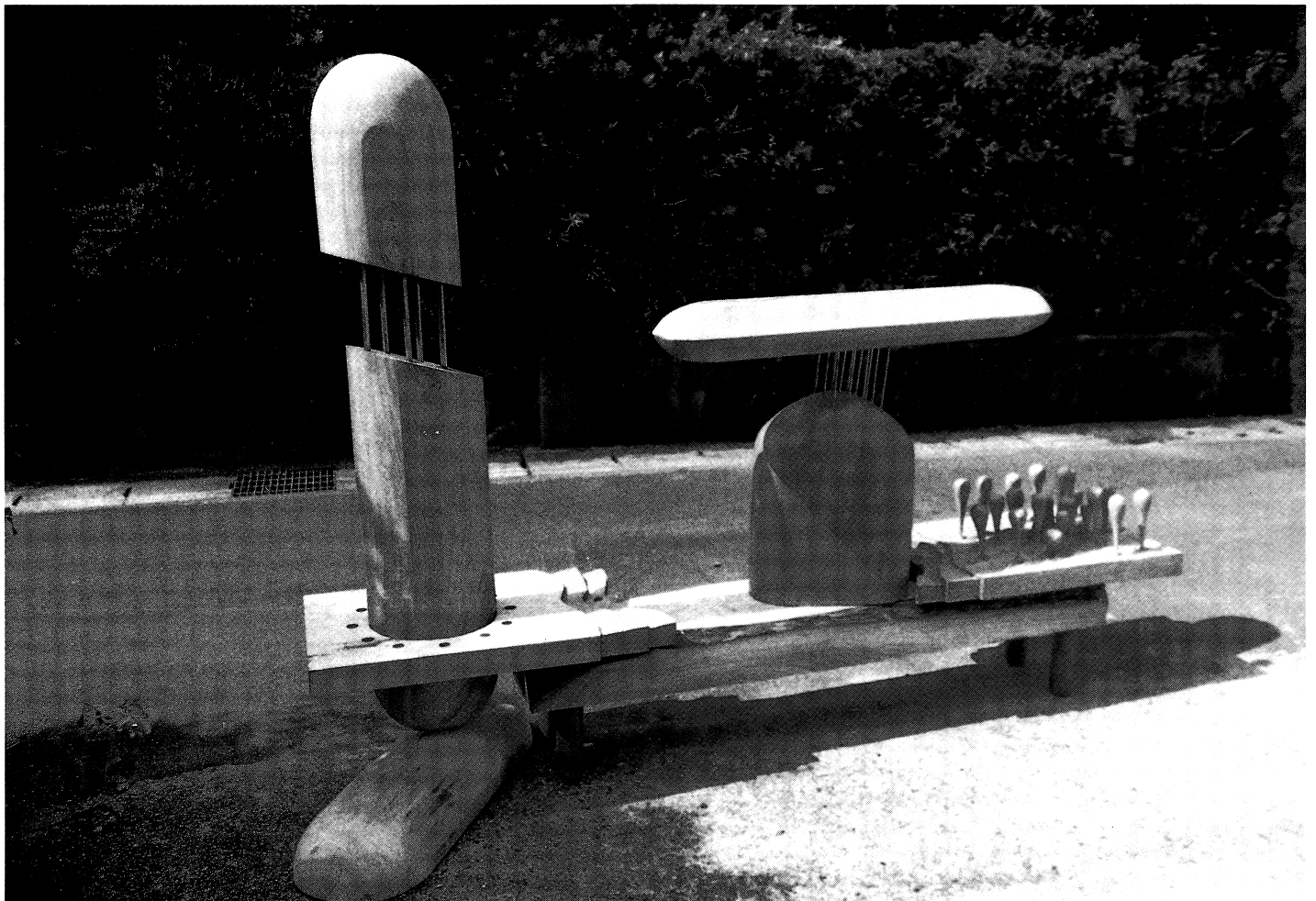
「風景は魂の状態にほかならない」と、スイスの思索者アミエルは語った。これは詩人や彫刻家、画家たちが、風景をそこに見い出し、語り、彫り刻み、描くときに自らの魂を自然界に置き、己の心の状態を反映させているのだ、と通常私たちは受けとめている。けれども、またこの言葉は“風景というものは、それ自身において何らかの意味を持っている”とも解釈できる。そして、このことは東洋において、特に日本の禅の思想とかなりの部分で合致するように思う。また、その表現においては具象であれ、抽象であれ、人の心の状態から出発するのだから、魂の投影としては同じ次元から発せられるので、この魂の問題については新しいも古いもない。



1986年 「水の風景」(楢・楠・黄銅、60×250×120cm)

私の中での“木”とのかかわりの旅の途中では、いろいろな風景（出会い）の記憶や 残像、経験などが“木彫刻”作業として、山登りの中から転化展開されてゆく。

“一期一会”の時空の中で、自然をしぜん^{じぜん}に受けとめて、一度自分の中で咀嚼^{そしゃく}し、また自然に帰したいと思う。現在のコンピューター万能の時代の中で、すべてが即戦即決、簡単明瞭に答えを出してしまいがちな風潮の中で《人間的曖昧さ》を持続しながら《存在》への形成行為を創造しなくてはならない“芸術”は、我々が思うより、はるかにゆったりとした動きで流れている。



1989年「私の森に潜むもの」(樟・朴・黄銅、180×270×60cm)